a man with a chimney

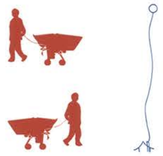
ここは大阪府北部に位置する、一見よくある郊外住宅エリアである。

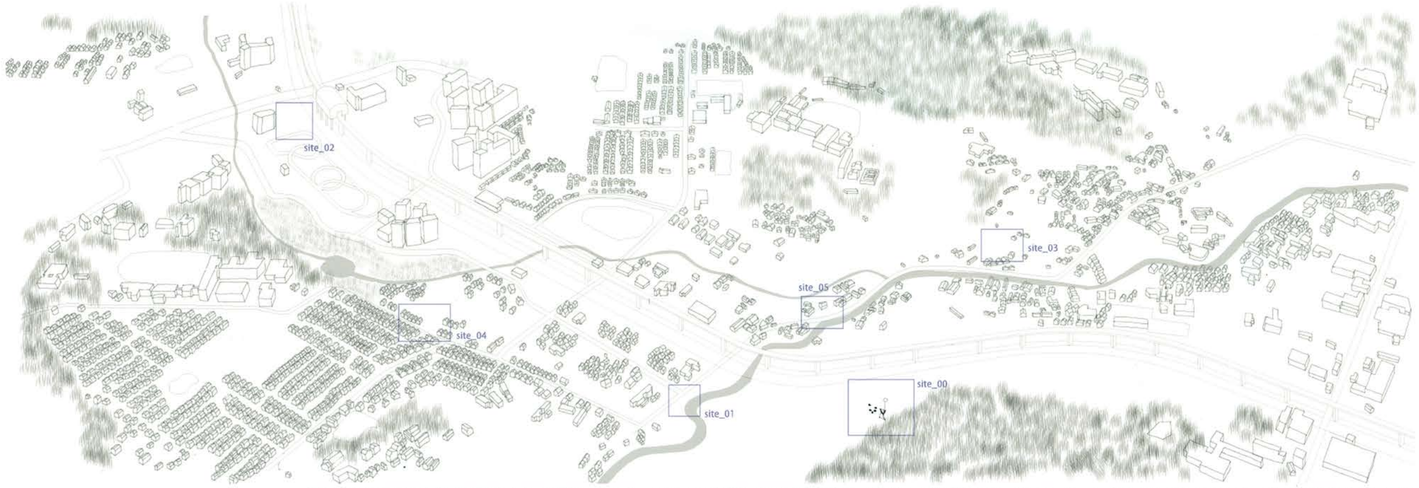
彼は、そんなエリアの中で、住宅開発前から細々と続く農家にうまれた。
彼は、彼と彼をとりまく世界の"きょり"をはかり、彼自身の世界の地図をつくっていくことに快楽を覚える。

それは、誰もが子供のころに持っていた、自分の世界が広がっていく探検のわくわく感を思い起こさせる。
またそれは同時に、古来から人間が、生き延びるために自分の領域を増やす活動をしてきたことを示唆している。

きょりをはかるものさしは、煙突のある彼の " うち "と農作業でつかうバスタブである。
彼はときおり、バスタブをひきつれて出かけ、いろいろな場所にバスタブをおき " うち "とのきょりをはかる。
そしてまた "うち " にかえっていく。

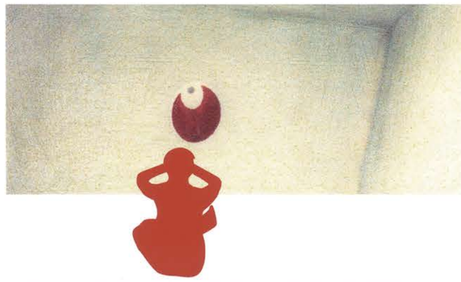
誰にとってもそうであるように、彼にとって彼の"うち"は、都市に住み社会の中に生きる自分の精神的なよりどころである。



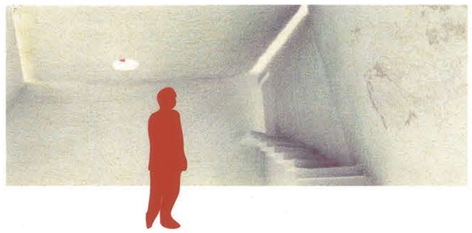


彼がいるところは大阪府箕面市粟生地区、いわゆる郊外住宅地である。しかし山に川に棚田、彼の生家の農家集落、昔ながらの自然も残っている。そしてモノレール、四角く新しい家、マンション、新しい人も物もどんどん入ってきている。それらは"うち" から放射状に広がるように位置している。彼は、この地区の集約点のような場所に自分のうちをたてた。外にでかけ、うちとのきょりをはかり、かきかけの地図は少しずつうまり広がっていく。

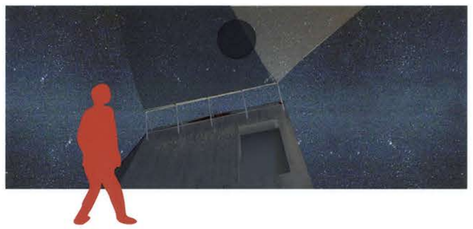
image drawing



彼は" えんとつ" の下に寝転がりバルーンを見る。 「今日のバルーンは静かだな。」 彼はバルーンを通して地球の自然現象を感じている。

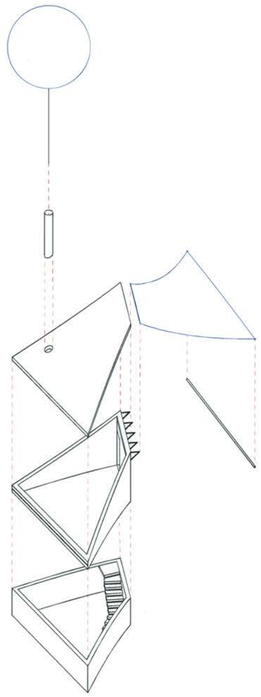


彼は昼寝坊した。「西側からの光の知らせによると、もう１５時。今日は静かにすごそう。」
うちは彼にとっては日時計のようなものでもある。



彼は夜空を眺める。「今夜は天気がいい。星空と黒い太陽？」彼はもしかするとバルーンを通して宇宙と自分の距離をはかっているのかもしれない。

バルーンはどこまでも高く
世界はどこまでも広がる
この地区のブラックホールのような場所に、のびる煙突



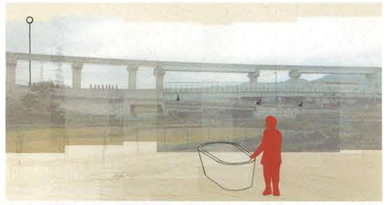
axonometric drawing

site_01　彼は棚田の脇にバスタブをおく。「棚田の端の水路はかわらない。でも、モノレールができて風景がかわって、前より虫が少なくなった。」

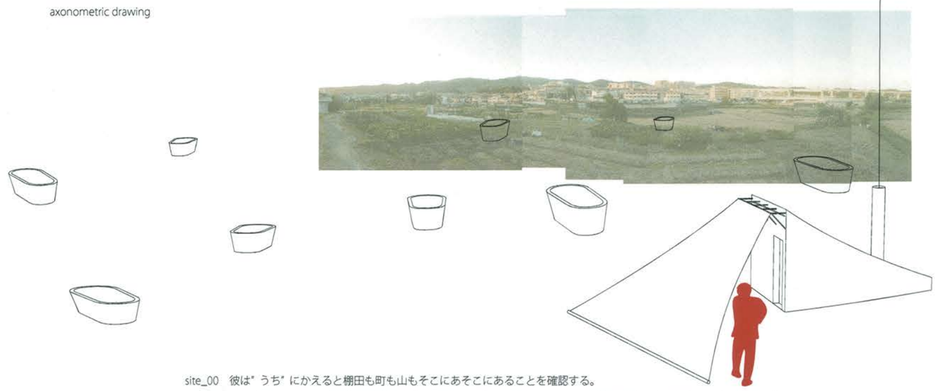
site_02　彼は丘の上にバスタブをおく。「ここはついこの間、開発された山肌の公園。木がなくなり、ずいぶんと" えんとつ" がみえるようになった。」

site_03　彼は古くから続く農家の集落にバスタブをおく。新築マンションが近くにできた。若い住人「何してるの？」 彼「あのバルーンの場所からこれを運んできたんです。」住人「え！？」

site_04　彼は新興住宅街にバスタブをおく。 「坂道はまるで　　うちに続いているみたいだ。ところで、四角い家がふえてきた。四角い　　家での暮らしってどんな感じだろう？」



site_05　彼は" うち" の近くにバスタブをおく。「幹線道路とモノレールで東西は分断された。土木的な構造物と棚田の組み合わせにハッとする時もある。」



site_00　彼は" うち" にかえると棚田も町も山もそこにあそこにあることを確認する。
今度はうちから見て、まちとの距離を再確認する。「まちにバスタブをおくと、うちが飛び地のように増えたようにも感じるな。」